



ほんものを たべよう **B**

Alter Weekly Order Catalogue

2020.2月2週号

提出日				
2/	火	水	木	金
4	5	6	7	
配達日				
2/	火	水	木	金
11	12	13	14	
翌々週分配達日				
2/	火	水	木	金
18	19	20	21	

オルターの提案

本当に安全な食べものを手渡すために

- 「だれが・どこで・どのようにつくったか」の情報を日本一公開します。
- 「国産」「無農薬」にこだわり、日本の伝統食を守ります。
- 原料段階・飼育段階からポストハーベスト農薬、遺伝子組み換え、放射能汚染、トランス脂肪酸、食品添加物などを徹底的に追放します。
- プラスチック容器・レトルト食品を追放します。

牛肉 BEEF

有機牧草で育った ブラックアンガス牛

ヘルシーな赤身牛肉です

(株) 知床興農ファーム

文責 西川 榮郎(NPO 安全な食べものネットワーク オルター 代表)



清水 信吾代表

国内最高レベル

世界遺産・知床半島の付け根、北海道標津町の(株)知床興農ファーム、清水 信吾代表は、私が国内最高レベルと評価する畜産を行い、「ブラックアンガス牛肉」「経産肥育牛肉」「豚肉」「ハム・ソーセージ」を出荷しています。

肉牛の最高峰ブラックアンガス牛

ブラックアンガス牛(肉専用種)は、明治時代に和牛を大型化するために、昔の和牛に掛け合わせた品種です。現在の松阪牛、但馬牛など黒毛和牛の祖先です。原産国のイギリスでもたいへん貴重とされている牛で、まさに肉牛の最高峰です。知床興農ファームでは、このブラックアンガス雌と和牛種を自然交配して生まれてきた雌牛に、再度ブラックアンガス雄を掛け合わせた「ブラックアンガス×黒毛和牛×ブラックアンガス」の子牛を出発に、交配を重ねて育ててきました。1997年オルター会員が協力した基金によって、ブラックアンガスが導入され、自家繁殖を続けてきました。

有機牧草

ブラックアンガス牛は、肥育仕上げの段階に入った牛以外はすべて夏場は農業、化学肥料を一切使用しない有機栽培牧草(チモシー、イタリアンライグラス、オーチャード、クローバーなど)や雑草(フキ、クマザサ、ダイオウ、ヨモギ、オオバコなど)を食べて放牧地で過ごします。穀物飼料は全く与えていません。

肉牛として出荷される雄牛は、子牛は春先に生まれるように季節分娩にしていますので、秋口までお母さん牛とともに放牧地で育ちます。生後1~1.5ヶ月の授乳期は母乳と牧草だけ、その後8ヶ月齢までは放牧され、牧草だけで育ちます。その後、肥育向けの雄子牛は牛舎で過ごし出荷直前の20~23ヶ月齢になるまで、有機牧草と合わせて、国産原料の自家配合発酵飼料を食べて大きく育てています。牧草から栄養を吸収する力はとても強く、まさに草食動物そのものですが、穀物飼料も食べるだけ食べさせています。良く食べます。

肥育牛のエサは国産(大半は北海道産)の農業残渣物(粉碎小麦、小麦ペレット、ビートパルプ、米ぬか、澱粉粕、雑豆、

酒粕、醤油カス、ホタテパウダーなど)と発酵飼料米に自家産の有機牧草を裁断したものを混合して給与します。その混合飼料以外に長いままの牧草も与えます。

輸入穀物を一切与えないのでポストハーベスト農薬や遺伝子組み換えを完全にクリアしています。狂牛病、O-157、口蹄疫とは無縁の、文字通り日本一の牛肉です。

ヘルシーな赤身牛肉

ブラックアンガス牛は和牛の風味を持ちながらサシが入りにくい、ヘルシーな赤身牛肉です。赤身なのに大変コクがあります。美味しい風味のある脂を含んで、柔らかく食べやすい牛肉です。

余計な脂肪分を食べることなく、良質なタンパク質なので、体脂肪の燃焼も効率的で、お腹にももたれません。

雌雄産み分け技術で子牛が高騰

知床興農ファームではかつてYBB・ヤングブルビーフ(オルターカタログ2010年10月3週号参照)に取り組んできました。そのYBBの出荷は2019年秋で終了することになりました。その理由は雄の子牛を入手することが極めて困難になったからです。雌雄産み分け技術により、生まれてくる子牛の7~8割が雌になったからです。そのため雄の子牛価格が高騰しました。

経産牛を安全なエサで肥育

知床興農ファームではYBBに代わって、経産肥育牛に取り組まざるをえなくなりました。すなわち牛乳を搾るのをやめた母牛を購入して、一定期間肥育するという事です。その牛は大人になるまで輸入穀物を食べていますし、化学肥料で育った牧草を食べてきています。ただし、搾乳牛はほとんど抗生物質の投与は受けていません。

YBBの雄の子牛が手に入らない以上、経産肥育牛に取り組まざるをえないという判断です。

ただし、知床興農ファームでは、経産牛を引き取ってから、ブラックアンガス牛の肥育用と同じ100%国産の農業残渣物を混合した発酵飼料を与え、有機の牧草をたっぷり与え

ます。放牧可能な時期には放牧し、自家産の農業、化学肥料と無縁な有機牧草を充分に与えます。みるみる毛艶が良くなり、肥ってきます。

導入する経産牛は、牛乳を搾り終わった月齢が50ヶ月前後の比較的若い牛としています。農場での飼育日数は120日以上とします。

最新の屠場システム

解体屠場は1996年2月にオランダのシステムを国内第1号として導入した北海道畜産公社北見事業所です。

O-157騒ぎの起こる前からO-157や狂牛病チェック体制を国内で始めていた屠場です。食道結索、直腸結索を行い、O-157の原因を完全にシャットアウトしています。屠殺から枝肉まで一度も肉に手を触れることなく、フックに吊るしたまま地面にも置かず、ドライ方式で、水は骨髄の洗浄に最小限度用いられるだけの落下菌の繁殖もないシステムです。雑菌の増殖をカットしているため、枝肉段階でもドリップが全く発生していない完璧な管理の屠場です。

この公社で屠殺、解体、ブロック熟成、その後-45℃で急速に冷凍し、知床興農ファームでスライス、パック詰めを行います。この途中、狂牛病特定汚染部分などの汚染や他の屠体と紛れることはありません。

長期熟成で柔らかくおいしく

その北海道畜産公社北見事業所で屠畜後1~2日枝肉(骨付き状態)で肉を冷やしてから脱骨し、ヒレ、サーロイン、リブロース、モモなど各パーツに分けます。それら各パーツをブロックごとに真空包装にして箱詰めし、畜産公社のチルド室(0~1℃)で4週間寝かせ、じっくり熟成させます。その間に牛肉のタンパク質が酵素の働きによって旨み成分であるアミノ酸に変わります。

長期熟成を経た知床興農ファームの牛肉は、柔らかくなり旨みが増して、文句なしのおいしさになります。

天才が開発

知床興農ファームは日本有機農業研究会の元幹事、本田 廣一氏が創業しました。天才的な畜産思想で全国の有機畜産をけん引してきましたが、惜しくも一昨年2018年に他界されました。改めてご冥福をお祈りします。

(株) 知床興農ファームの牛肉

●品種

ブラックアンガス(ブラックアンガス雌×黒毛和牛雄×ブラックアンガス雄)…交配は自然交配です。農場で飼育している母牛から生まれる雄の子牛のみ育てています。雌の子牛は将来の母牛候補です。
ホルスタイン経産牛…牛乳を搾りつた雌牛です。50ヶ月齢前後の比較的若い牛を導入。農場では120日以上飼育します。

●エサ

農業、化学肥料を一切使用しない有機栽培牧草(チモシー、イタリアンライグラス、オーチャード、クローバーなど)、雑草(フキ、クマザサ、ダイオウ、ヨモギ、オオバコなど)をたっぷり食べさせています。
肥育に使うエサの穀物飼料は国産(大半は北海道産)の農業残渣物(粉碎小麦、小麦ペレット、ビートパルプ、米ぬか、澱粉粕、雑豆、酒粕、醤油カス、ホタテパウダーなど)と発酵飼料米を混合した自家配合の発酵飼料です。その混合飼料のほか、長いままの有機牧草も与えます。

●飼い方

ブラックアンガス牛は牧草のある5~11月は期間放牧しています。放牧地は牛舎とつながっていて、雨の日や嵐の日には牛舎でしのいでいます。冬場は放牧地との通路は閉まっています。牛舎の生活です。屋根なしのバドックがあって、そこで乾草をたっぷり、いつでも食べることができます。
経産牛も5~11月頃、牛舎から自由に放牧地に行けるようにしています。
肥育直前にはブラックアンガス牛、経産牛とも開放型の広いバドックで舎飼いです。
ワクチン、抗生物質など動物医薬品は、病気や怪我をしたやむを得ない時以外使用しません。今回お届けするアンガス牛は、これまで病気や怪我もなく一度もワクチンなど医薬品の世話になっていません。
牛舎から出た糞尿は堆肥舎で発酵堆肥化して、牧草畑や自家野菜に利用しています。

一般の牛肉の問題点

輸入牛肉、とくにアメリカからの牛肉には狂牛病や成長ホルモン使用の心配があります。輸出時の検査体制も不十分です。牛の肥育に使われるのは、ポストハーベスト農薬の心配のある輸入穀物(トウモロコシ、大豆、小麦など)で、農業のような脂溶性毒物は牛肉に残留するおそれがあります。
輸入穀物を配合して作る濃厚飼料には防腐剤など飼料添加物が使われています。家畜に使われる飼料添加物は人間に対する食品添加物より緩い基準が適用されています。密飼い、舎飼いなどで衛生状態が悪いと、抗生物質など動物医薬品が使われます。
肉屋の店頭での精肉加工時には複数の牛肉を混合させる成型肉もあり、個々の肉のトレーサビリティは絶望的です。ニコチン酸アミドによる発色も行われています。